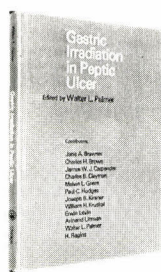


本書の内容は、このような状況下
にあって、なお胃潰瘍に対する放射
線治療という研究課題に対する努力
を遂行し、その結果に対して種々異
った見地から多くの科学的資料に基
づいて検討を加え、この治療法に對
する結論に導いたものです。そして
その検討が、治療当事者の主観的判

W. L. Palmer 著



国立がんセンター放射線治療部長
北川 俊 夫

断を避け、常に客観的且つ冷静に行われていることは、その学問的良心に対しては敬意を表されるべきものでしょう。

結論としては、この治療法は胃潰瘍の改善に有効であるとし、同時にこの治療法についての不利な点も指摘しております。特に放射線照射後

の変化として懸念される発癌の問題に関しては極めて慎重に検討を加え、その結果照射部位である胃における発癌の危険性を全く否定することはできないと述べています。

しかしながら、胃潰瘍が治療されたことによる全身状態の改善によるとその後の生涯における活力増強の利点は生存率において、上記発癌の危険性による短所を明らかに凌駕していることを統計資料に基づいて強調しております。

以上の結論に関しては読者の考え方によってそれぞれ異なる見解の示されることも想定されますが、一つの治療法について広い視野から結論に導いたこの研究は高く評価されてよいと考えますし、この研究、検討に用いられた多くの資料は単にこの治療法に止らず、今後放射線治療の発展に大きい役割を果たすであらう。

(The University of Chicago Press,
Chicago)

161 pp. with figs. 1974 ¥ 2,770

(医学書院洋書部取扱い)